

せる説をやぶりて和名鈔に比奈とあるを本の名とせんときは玉かつまの説のごとくひもじをひきていふなればひいなのかなならましおのれがおろかなるこゝろにはいづれをよしともさだめがたし

〔古今要覽稿 歳時〕ひ、なあそびひい。な。あ。そ。び。ひ、なあそびの始さだかならず崇神天皇の御

時和珥坂の少女の歌に比賣那素寐殊望ヒメナソヒメスモツノゾロとあるを私記に今案ひ、な遊なりといへり弘私記

か公望私記か、まらずといへ共公望承平六年十二月八日宣陽殿東廂に於て日本紀を講ずとい

へば其ころの私記ならんさらばたとひ崇神天皇の御時よりありといふことはうたがはしく

あり共承平の前より行はれしことはうたがひなかるべし釋曰天曆四年東宮御殿祭の條にひ

ひなの料といふものをあげ記御産部類引九記うづば物語に右大將のとう宮わかみやにもてあそびも

の奉り給ふといふ下にひいなに子の目させなどあるを合考ふるに當時はやごとなきあたり

にてもせさせ給ふ事とまらるたゞしこれはあまがつはふこの類にてそれよりうつりてひ、

なあはせなどいふことさかりにをこなはる齊宮女御集中務集うづば物されど時節はさだま

らざりしを今のごとく三月にかざりて家ことにかざりまつることも後土御門院の御宇の比

は、すでに有しと見えて飛鳥井榮雅の三月三日雛遊の歌月刈藻集に見えたり見えし本集には

明五年に出家して延徳六年に薨ぜりれざるを一條禪閣の世諺問答にまざるされざりしは世間

一統の事にはあらざりしなるべしさていにしへは時節にか、はらざりしを今はかならず三

月三日にをこなふこと、なりしは上巳の祓の人形とひなあそびと混せしなるべしといへり鹽

日次記事鹽尻伊勢貞丈一説には幸の神祭の遺風なるべしともいへり鹽

〔釋日本紀二十四〕十年崇九月壬子大彥命到於和珥坂上時有少女歌之曰略中比賣那素寐殊

望私記曰言不知殺逆之謀爲兒女之遊今案比比奈遊也